

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第621号 平成25年10月4日

## ケルンの石

先日、作家森村誠一氏の「老進気鋭」という文芸春秋に掲載された一文を紹介しました。

森村氏は、「定年という、あたかもその人の能力に死刑をいい渡すような仕組みを甘んじて受け入れるか、それを断じて拒むかはその人の考え方であるが、前者は大人しく横町のご隠居と化し、後者はまだ十分働けると荒野の狩人となる。ご隠居と狩人の違いが、シニアの社会的ニーズの違いとなって現われる。」と述べています。

つまり高齢者は、定年後の人生を余った生「余生」にするか、誉ある生「誉生」にするかの分岐点にいるという訳ですが、折角与えられた人生なら、高齢者といえども若い人のお世話になる事ばかりを考えず、自立の心構えは持つべきだろうと、私も思います。

そうはいつでも、今の世を高齢者が生きて行くのは容易ではありません。その高齢者の生活を、医療や福祉の面から支えているのは現役世代という事になりますが、その現役世代自体も、人口は減り続けている上に給与所得も目減りしており、医療や福祉制度を持続可能な仕組みとして維持して行く事は容易ではありません。

森村氏は、前掲の「老進気鋭」という一文の中で「これまでせつせと身を削る様にして働いてきた老人が働けなくなったとき、次の世代がこれを支えるのは、時の流れに乗って生き、そしてこの世を去っていく人間の歴史が編み出した輪番制である。」と述べています。つまり、「俺たちはなんで年寄りの面倒を見なきゃならないのか」等と思っている若者達は少なくないと思いますが、前の世代を後の世代が支え、その世代をまた次の世代が支えるという仕組みは、「輪番制」という人間が編み出した知恵なのだという訳です。

森村氏は、現役の世代は「老人がつくった社会をリレーランナーのバトンのように」引き継いで来たのだから、医療や年金の制度を維持する為の保険料は、「老人（先達）の生活を支える義務ではなく、人類歴代の輪番である」と述べています。

森村氏は「人間は先達から時代を引き継いだとき、過去の石器時代からやり直す必要はない。先達から引き継いだ時点から走り出せばよい」と述べていますが、我々が先達から多くのものを引き継いで今日の生活を築いて来た事は確かです。そして、そう考えると、今日、医療や社会保障の負担を巡って世代間に対立の構図が見られる事は、不幸だと思います。

森村氏は、「人生はケルンの一石である」と述べています。

ケルンの語源はドイツ語の Cairn で「石塚」を意味するといわれている様に、登山道に置かれた道標ともなっています。

数え切れない程の先達は、それぞれの歴史を生きる中で、一つずつケルンの石を積んで来たのであり、私達はそれを道標に自分達の生活を築いてきたといえます。

だからこそ私達には、「この世に生を受けた以上、どんなに小さくともよい、自分の石を後から来る者の標として、過去、人類が積み重ねてきたケルンの上に積み足す（「老進気鋭」から）」事が求められているのだと思います。もしも我々が、その営みを忘れ、自分がいま生きている瞬間にのみ心を奪われて日々を送るなら、日本に明るい未来が到来する事はないでしょう。

私達が次の世代にバトンを渡す時、「先達から引き継いだ時代に、我が時代の付加価値としてケルンの一石を積み重ねていかなければ人類は衰亡する（「老進気鋭」から）」という森村氏の警鐘は、決して軽いものではありません。（塾頭：吉田 洋一）